

勝林寺報



私のために命を擦り減らした、擦り減らしながらわたしを育ててくれた。いのち全部を私にゆずつてくれたのだと思いました。

母が死んでもう何年にもなるけれど、また母の姿は消えて仕舞つたけれど、母の命といふか願いというか、それはいまも私のこの今命の中に生き続けていくれる。

「お花祭り」に

今年八十の男

わたしは男の兄弟三人。その長男でありました。ほかの子供は全く手もかからん健康なもので大きくなつていきましたのに、私一人は、赤子の時分からひ弱で、親の乳も自分之力ではよう吸わらず、とても大きくなるまいと、まあ、見捨てられかねないそんな子どもであつたそうです。

そのわたしを自分の身に代えて育ててくれたのはほかならぬ母であります。大正のおわりから昭和の始めにかけて、世界的な大不況のなかで殊に農村のくらしはどん底であったそうです。

小学校にあがつたころにはもうあの満州事変がおこつて、それはどん底のくらしあつたそうです。

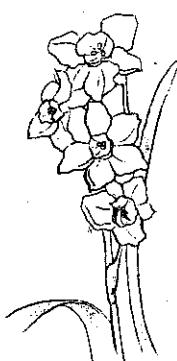
だからも役立たず邪魔つ気にされる病身なこの私を、母ひとりで抱きかかえはぐくみ育てあげてくれたのでした。

その母が五年前、九十八歳で亡くなつていきました。

亡くなるまえ6・7年ば眼病を患つて全くの盲目になりました。

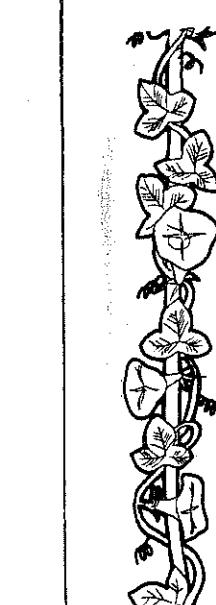
そうなつてしまつた母看病しながら、なんのときになつて、母の御恩を思ひだし、なんでもこの母の看病は、この私がこころを傾けさせてもらわなければと思いました。それからまた、なにも見えず、ただ眠るばかりのこの母がこうなるまでいのちをすりへらしたのは何のためか、と考えてみました。

納骨参拝研修旅行



蓮如上人から、こんな話を聞いたことがあります。(蓮如さまも、親鸞聖人から語り伝えたことを話されたのでしょうか)

わたしの恩師法然聖人さまのつねづねの仰せに、「わたしが死んでも決して菩提所(位牌や像をまつる靈廟や墓)を建てようなどとはならない。わたしの居場所は南無阿弥陀仏のお称名のなかこそわたしの居場所です。」と仰せがありました。



納骨参拝研修旅行はそんな旅です。

地区の代議員さまを通して、早めに申し込んで下さい。(人数制限がありますので)

こうたんえ
降誕会(親鸞様のお誕生日)



こうたんえ
兵庫教区基幹運動推進委員会総会
西宗寺永代経

三十一日
二十九日
二十八日
二十七日
二十六日
二十五日
二十四日
二十三日
二十二日
二十一日
十八日
十七日
六日
四日
一日
十一日
十四日
十五日
十四日
十三日
十二日
十一日
十日
八日
七日
六日
五日
四日
三日

永井 均氏宅法事
藤野すみ子氏宅法事
坂本 晃氏宅法事
こどもの日
「ビハーラ兵庫」総会
青年僧侶の会研修会
平田専福寺永代経
平田専福寺永代経
日高町役場
幼PTA総会
兵庫県社会福祉士会総会
田村輝雄氏宅法事
西宗寺前坊守様法事
宗祖降誕会
田村 忠治氏宅法事
検診
田中 輝幸氏宅法事
ケアマネ総会
数森三男氏宅法事
出石組合念佛奉仕団
出石組合念佛奉仕団
出石町役場
兵庫教区基幹運動推進委員会総会
西宗寺永代経

五月のことよみ

また、「人の亡き跡を弔うといって、位牌や卒塔婆など建てるのは、〈輪廻するもの〉がするしわざです。」とおっしゃっていました。(蓮如上人ご一代記聞書「空善記」)

「輪廻」と言うのは、詳しくは「輪廻転生」といって東洋の古い時代からの「生命觀」です。そのように生死を繰り返して苦悩の世界を絶えることなく経巡るのがものの「いのち」です。

ものの「いのち」は、死によつて消滅するものではない。そのものの生前の行為の影響力(業ごう)によって次の世に生まれ変わります。そのように生死を繰り返して苦悩の世界を絶えることなく経巡のがものの「いのち」です。

次ぎの世には少しでも良いところに生まれ変わってほしいと、位牌に対し卒塔婆むかつて供養するのです。

ところが仏教を開いたお釈迦様は、「この世とあの世」に輪廻転生するそんな「いのち」からの解脱(ぬけ出)して、無我清淨ないのちに生き変わる道をおすすめになりました。

如来さまの大きいなる願い(本願)に願われ、その呼び声「南無阿弥陀仏」のなかにからめとられ(攝取され)たわたしのいのちは、もう輪廻転生するいのちではありません。

わたしたちも、この世のいのち終われば、共にお念佛「南無阿弥陀仏」のなかに帰るのです。

浄土真宗、ことに勝林寺門徒は、遺骨を、親鸞様のいなさるお念佛の道場「大谷本廟」に納めてまいりました。遺族だけでなく、門徒みんなでお伴(とも)して。

納骨参拝研修旅行はそんな旅です。

地区の代議員さまを通して、早めに申し込んで下さい。(人数制限がありますので)



結婚披露宴でのお祝いのことば

四月は花の季節。結婚のシーズンです。

四月上旬、立て続けにお出度い祝宴にお招きいただきました。そこで聞いた仲人さまの「おいわいの言葉」を二つ、テープ起こしをしてそのあらましを紹介いたします。

(その一)

新郎の高校時代の恩師。国語の先生であつたとか。

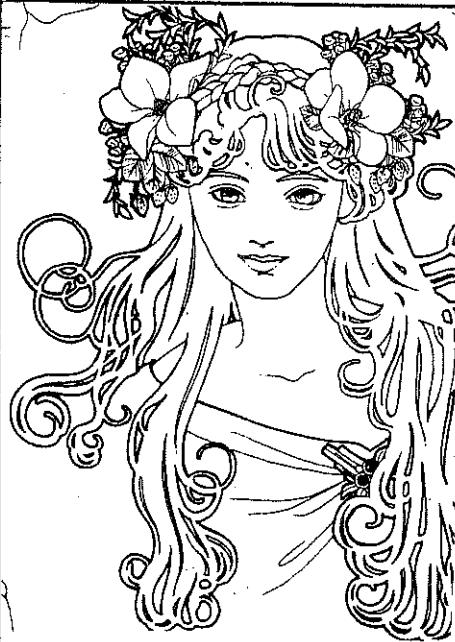
きょうのこの縁を言祝いでおよろこびと励ましのここを贈りたいとおもいます。

「縁」という文字を、中国の古い字引で見てみました。糸辺をのぞいた縁のつくりは、もとタンと発音し、端午の節句などの端、はしごこという意味です。布を切った場合の両方の切れ端です。ですから、家などの一番の端っこは「お縁」といいます。また屋根の東のヒサシと西のひさし。これもタンです。そしてここから、タンとは「どう考へても一つになるはずのないもの」ということをあらわします。

そのタンに、糸がついてできている「縁」という字は、「とうてい一つになるはずもないものを結ぶ糸」ということを示す会意文字です。どう考へても一つになるはずもないものを結び付ける不思議な糸です。

「縁」という文字にこめられた東洋の知恵。ふるいおばあちゃんの美しい「めおとの夢」を、この巣立ちの日に、はばたくお二人に贈りたいとおもいます。

おふたり、ほんとうに、おめでとう。



結婚ということ

先週に続いて結婚式での祝辞を紹介致します。

(その二)

今回出会った結婚式は、珍しく神戸六甲の山奥の小さな浄土真宗のお寺での仏前結婚式でした。その寺の若い住職さまが新郎の高校時代の親友とかで、それでおとうさんに当たる老住職さまが仲人ということになつたのです。そのご老僧さまのおゆわいのことば

辛酸に耐え、苦難を二人して越えたある日、

「この人と夫婦として出会い、いのちと共にしてきた不思議きもつたいなさ」をしみじみ思い知るのです。わたしはその日が来て、はじめてほんとうの夫婦ができるのでないかと思います。いかと/or>思ひます。今日の婚礼の式は、ふたりの命の出会いのほんとうのよろこびを探り当てるための旅への出発です。

わたしは祖母から、夫婦と言うものは、男

女ふたりの赤ん坊のあんよの親指から出ている「赤い糸」を互いに手繰り手繰つて、そうして一つの命にたどりつくものだと教えてもらいました。

ですからほんとうの夫婦の幸せは、一人して手を携えて、探り当て作り上げて行くものです。

「縁」という文字にこめられた東洋の知恵。ふるいおばあちゃんの美しい「めおとの夢」を、この巣立ちの日に、はばたくお二人に贈りたいとおもいます。

おふたり、ほんとうに、おめでとう。

は、わたしにとつてはただびとではない。私を導く阿弥陀様」また「わが妻こそ、わたしのいのちを育んでくれた觀世音菩薩の化身」。心の中で、互いをいつくしみおがみ合いたがら、お二人とも九十歳の長寿を生きられたのでした。

男女の性の出会いを、ここまで昇華できますが、とにかく、今日のこの出会いをご縁に、お二人して素晴らしい幸せを搜し求め出発の日門出の日にしていただこうことをここから念願してお祝いのことばといいたします。

この寺は浄土真宗です。この浄土真宗を開いた親鸞聖人というかたの「夫婦觀」夫婦と

いうものの感じ取り方、夫婦の生き方をご紹介します。あなたたちお二人、生涯かけてお考えいただきたいとおもいます。

親鸞様の時代には、お坊さんが女性にころを引かれることはあってはならない事でした。女は仏道修行のためには邪魔者扱いされていた時代です。

その時代にあって親鸞は、時代の女性観を百八十度転換し、敢然と僧侶の身のままで結婚に踏み切りました。

その決断を促したのは、京都六角堂での観音菩薩からの夢見せであったと伝えられています。

さとりの道を求めて苦しんでいたあなた。あなたは人間のいのちの宿命に動かされて、女性の身を犯すであろう。わたしはそのとき、すばらしい女性となつてあなたにこの身を捧げましよう。かくして二人生涯終えるまで、すばらしい幸せの世界に生きましょう

「寺報」は

早急に配つて下さい。

